
フェイク

カトラス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フェイク

【Nコード】

N8930B

【作者名】

カトラス

【あらすじ】

銀座の高級クラブで、木村は男と知り合う。意気投合した二人、男から儲け話があると切り出され、

銀座の高級クラブで、男は酒を飲んでいた。

ここ、二カ月の間、男は土日以外、毎日のように来店するので、店の従業員で男の事を知らない者はいなかった。

ただ男の職業は謎だった。

男は高級スーツ、高級腕時計に身をつつみ、来店すれば、必ず、豪快に金を使うので、店では評判の男だった。

男は最近、入れ込んでいるホステスに、話しかけた。

「ちよつと、知りたいんだけどね、向かいの席に座ってる紳士、誰だか知ってるかい？ 顔は覚えてるんだけどね、でてこないんだよ。」

話しかけたいんだけどね、ほら 名前わからないと失礼だろ〜」

ホステスは、向かいの席の紳士の顔を少しみてから、男に言った。

「木村様ですよ、き・む・ら」

とホステスは意地悪ぽく言った。

「そうだった。木村さんだったね。たしかあ不動産屋だったかな」

「違いますよ、都内で手広くパチンコ経営なさってる方ですよ」

そう、ホステスから聞いて男はニヤツとした。

男は店のボーイを呼んだ。

「すまないがね、向かいの紳士に一番高いシャンパンを持っていてくれないかい」

「かしこまりました」とボーイが行こうとしたところ、ボーイの腕を軽くつかんで、

「必ず、私からだと言っただよ」と言っつて、ボーイのポケットに一万円札をつっこんだ。

「かしこまりました」

ボーイは嬉しそうに戻っていった。

しばらくすると、さきほどの向かいの紳士、木村がお礼のあいさつに男のところに来た。

「どうも、高い酒を頂いたみたいで」

「いえいえ、お気になさらないでください」

「ところで、どこかでお会いしましたか？」

と木村は男に聞いた。

「実は以前、私には無二の友ともいえる友人がいたのですが、先日、病気で亡くなった次第でして、その友人に木村様が似ていたものだったので、失礼だとは思ったのですが、お酒をお持ちした訳なのです」

「そうだったですかあ。いやいや、これは全く奇特な方だ」

木村は男が奢ってくれた訳がわかって、安心したのか大笑いした。

「これも、何かの縁ですよ、今日は大いに楽しみましょう」

男はそういって、ボーイにどんどん酒をもってこさせた。

酒がまわってすっかり上機嫌になった木村が男にいった。

「さきほどから、奢ってばかりじゃ申し訳ない。今度何か私にお礼をさせてくださいよ」

それを聞いて、男はにやつとした。

「お礼なんて、とんでもないですよ。木村さんは、ほんと律儀な方だなあ」

正直わたくし、お金とか物には、全く興味がないんですよ。お金なんて使いきれないくらいありますし、誰かに寄付したいくらいです」

男は話を続けた。

「そうだ。木村さん、これ大きな声じゃ言えないですけどね」

そう言って、男は本題を木村にきりだした。

男の話によると、木村には親から譲り受けた莫大な資産があり、それを、元手に株式等に投資をしてさらに儲けているという。そして、木村にも自分に投資してみないかという事だった。木村は少し考えたが、男が絶対に損はさせないし、投資した金額を五倍にして

みせる。最初は一切お金はいらない、投資分のお金は男がたてかえる。木村が儲かってから、たてかえた分だけ返してくれたらイイという、なんとも、おいしい話だった。

ただし、一つだけ条件があつて、木村の持つてる資産を全部、男に見せてほしいといった。

なんで、男が資産を見せて欲しいといったか？ 木村は思ったが、男がただ単純に取引する相手の資産をみて、安心したいだけだと言つたので、見せるだけならタダだから、それぐらい問題ないと考えた。

そうして、木村は男に、住所と電話番号を教えて、翌日木村の自宅で落ち合う運びとなつた。

……無論、男は木村の住所とか素性は事前に下調べして知っているのだが

木村の自宅は田園調布にあり、凄い豪邸だった。

男は木村の自宅の中に案内された。

「いやあ〜木村さん。素晴らしいお宅ですね」

木村は照れ臭そうに、男にいった。

「そんなことないですよ〜あなたの方がほんとに凄いくせに〜」

木村は思った。俺の隠し財産とか見たら、あの男きつと腰を抜かすだろうな。

そうして、木村は男に貯金通帳、帳簿とか、隠しの金庫とか全てをさらけ出した。

男は、木村に言った。

「予想以上に凄い方であ〜なかでも、度肝を抜かれたのは、地下室にあつた

金塊の山ですなあ〜」

木村は褒めてもらつて、満足気だった。

「それでは、近々いい報告ができますよ」

そう言つと、男は木村の財産類を手早くカメラに写して自宅を後にした。

それから、二週間後、木村の自宅に朝早くから大勢の男達がやってきた。

男達の一人が玄関のチャイムを鳴らした。

「はい、どちら様でしょうか」とメイドが対応した。

「国税局の者ですが、捜査のため、自宅に入らせてもらいますよ」と言つて、男達は木村の自宅に消えていった。

そう、銀座でのあの男は国税局の敏腕マルサだったのだ。

男はニュースで見っていた。

そしてこう言つた。

「銀座でいくら、使つても木村からしぼり取れる、追徴課税の支払いを

考えたら安いものだな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8930b/>

フェイク

2010年10月8日15時50分発行